

やす じよ
泰 女 句 集 (抄)

出あひは今日ひとときは高き半夏生

(評) 時間をかけた丁寧な作句活動から句だ。なお、この句は本会の句会において三点句になった作である。

じゆんさい
列をなす蓴菜舟や小雨ふる

(評) 句になるべき内容が掴まっている。それが第一印象だった。実はここが問題だ。そのことが見えると、実力は間もなくつくし、上がる。しかも自学自習ができるレベルに入っているのを強く感じる。メモを準備して臨むようにもなっている。

なつさにわあさひ と
夏狭庭旭まぶしく外に出よと

こしたやみ えず
木下闇小鳥さへづり風おどる

尺玉や大空響す最上川
とよも

蝉の声じじがいつしかみんみんと

雨上がり雲まで届と蝉の声

虹生るゝ大橋めき屋根夕暮るゝ
にじあ る ゆうぐ る

釜を撫で一人占めせる露天風呂

(評) 何という切り口であろう。俳句の持っている特色の一つである切り口の鋭さ故の見事さ、これ程の心の襞をこうも的確に捉え得るのは、指導を受けたか、どうかをも一気に吹き飛ばす生命力がある。指導している私には書けない。

名月やおそなへもらひ子らさわぐ
え い

ゆらくとゆらりと蕎麦花雪のやうよ

心まで稻穂波うつ影写し

紅葉を写す露天風呂さへづりもえず

初冠雪吾ひとり濡るゝ里の雨あ

蔵王の露天風呂より眺望ちようぼうして作れる

雪や降れ暇持て余すロープウェイ

鳥海山の初冠雪を見て作れる

初雪や早や鳥海に薄化粧

葉山の冠雪に作れる

雨混じり秋風抱腹吾が耳に

(評) 雨混じりの秋風が寂しさ、もの悲しさを感じるのが日本人と思ひ込んでいた私は、驚いた。秋風を大勢の人達が大笑いしている声に聞こえるとは。何度確認しても、そうだと。

露天風呂垣根波打つ程の風

賀状書く俳句サロン続けたし

(評) 「言の葉あそび教室」としてはじめた本講座を、泰女氏はしばしのためらいの後、「俳句サロン」との認識で、本句を仕上げた。今、本人の脳裏には、「言の葉あそび」の中でも、俳句の占める部分が大きく広がり始めていると言って良いと思う。

人は、変わるときには、一夜にして変わる事があるのだ。私は、「俳句サロン」との認識を私からのアドバイスや強要でそうしたのではなく、しばしのためらいの後、本人自身だった事を証言しておきたい。

初雪や柿の実に帽子かぶせたる

朝の雪屋根すべる音落ちる音

母剥むけば見事にならぶ柿のれん

雪降りぬ白寿媪おうなの足痛み

白寿媪家人留守冬火傷せる

世話したき卒寿媪そつじゆ今日は風邪

(評)この句だったか、指導しながら、手本の書をしたためようとして、涙が止まらなかった。卒寿中半の私の老母は、人付き合いが上手いとは言えず、なかなか、この冬は外に出たがらなかった。どうしたものかと迷いながら、参加させたので、馴染めるか、どうかと心配しながら、参加させた状態だった。この句で安心もし、有り難いとも感じ入った次第である。

町内温泉保養地「あったまりランド」にて作れる二句

大寒やねこ型バスを一人占め
がた ひとりじ

ねこバスで青空ながめ寒の内
かん うち

雪よ止め白寿媪の立ちくらみ
や はくじゅおうな

春の夜雪降らざれば大寒も

着ぶくれて白寿の媪春を待つ

指導・評 星川紀一郎